

# 立花隆

2014.6.28

74 歳

誕生日

記念

自分のいふこと、  
なかなか分らないですから。





# 立花隆 74 歳記念インタビュー

## —記憶をたどるスケッチ—

### 「幼少の記憶」

—今回のインタビューでは、誕生日にまつわるお話を伺い、立花先生の歴史を少しずつ紐解いていきたいと思います。

**立花** だけど、(パーティーまで) あと何日あるの？

—あと、一週間くらいです。

**立花** 一週間だと、あんまりしゃべりすぎると大変だよ、あとの編集が。(笑い)

—その場合は、今回はダイジェスト版の冊子にして、総集編を今年の年末くらいに出したいですね。明日、先生は締め切りを2つか3つ抱えていると伺いました。

**立花** そうなんです。ははは。

—一番忙しい時にすみません。早速始めましょう。まずは、74歳おめでとうございます。今年のお誕生日はアメリカで過ごされたと伺いましたが。

**立花** 今年は、アメリカです。

—外国で誕生日を過ごされるのは、何回目か覚えていらっしゃいますか？

**立花** それは、全然記憶にないですね。外国で誕生日を過ごすのは珍しくもないですから。そもそも、大学の時に、原水爆禁止の映画上映でヨーロッパを歩き回っている時がありましたね。たしか、二十歳の誕生日をフランスのクス＝アン＝プロヴァンス(南部に位置する港町)という町で迎えました。

—先生は、長崎で生まれ、すぐに北京に行きますが、その頃の北京は「外国」でしょうか？

**立花** そこは、微妙なんですね。ある意味では、外国なんですけど、ある意味では、日本が半占領状態にしているといった、法的には非常に曖昧な状態です。うちの父は、もともと長崎の活水女学院の国文科の教師だったんですね。その頃太平洋戦争はまだ始っていないけど、日中戦争は始っていました。活水女学院はミッションスクールですから、情勢が変化する中で、次第にミッションスクール潰しというのが国策として行われていきます。それまでは教育関係の決まりごとに対して、日本政府による上からの押しつけは、そこまで強くありませんでした。もちろん、ある程度は押しつけがありますが、ものすごく厳しくはなかったんです。でも、それも徐々に変わっていきます。昔、教育勅語というものがあってでしょ。教育勅語というのは、天皇から各学校の校長に対して、天皇の御言葉として下されるわけです。それを、いただき奉るという一連の儀式があったんです。全学校の教員生徒一同で恭しく儀式を行わなければならない。しかし、それをきちんと行わずに大問題になったのが、内村鑑三の一高の事件、不敬事件ですね。知っていますか？

—はい、歴史の教科書で。近頃、国歌斉唱や国旗掲揚の際の起立、不起立が問題とされていますが、これとは全く違いますか？

**立花** それどころじゃないですね。戦前の国家は、今の日本と全然違って、宗教国家ですから。日本教という名のもとに国家があったんです。その感覚というのは、今の人には全く分からないですね。僕も、後にいろいろ勉強してわかったという感じで、実感としては

ないですね。

——そうですね。

**立花** もともとミッションスクールの経営資金はアメリカのメソジスト教会から来ていました。それなりに大きな教団だったので、資金は潤沢に来ていたと思います。まず、その資金が止められてしまいます。

——日本政府によって、止められてしまうということですか？

**立花** そうですね。調べればわかると思うのですが、具体的にどういった手段を講じて止めたかは分かりません。活水の校長先生は、歴代アメリカ人だったんです。おそらく、日本に滞在が許されなかったと思うのですが、校長先生は、アメリカに帰ってしまいます。それとともに、お金の供給も止まるんです。日本でミッションスクールは経営が立ち行かないという状況が作り出され、みんな、食べていけなくなります。なんとか食べていく手段として、それぞれ個人的にいろいろなことをやるなかで、うちの父は活水を退職して、文部省派遣教員として中国へ行きます。北京は日本政府がある意味仕切っているという状態でした。とくに教育行政において。いずれにしても、うちの父が何をしたかという、北京市立高級中学校という北京大学に入るナンバーワンの学校に副校長という形で、入るわけですね。

——キリスト教とは無縁の世界ですね。

**立花** もちろんです。「私は、キリスト教徒でございます、こういう次第で、長崎を追われてこちらへまいりました。」なんてことは、だれも言いませんよ！中国に行って、いろいろなポジションに就く人は、皆それなりの過去を引きずって、右翼とか左翼とかいろいろといたわけですね。もちろん共産党もいます。そうした、ごちゃごちゃした関係の中で、経済的には悪くない生活を一家は過ごしていました。

——そのころの北京の記憶はありますか。

**立花** いろいろとありますよ。どこかにも書いていますが、部分的な記憶があります。何しろ5歳ですからね。終戦が1945年で5歳ですね。だからその前の前の年かな、北京に来たのは？

——『立花隆のすべて』の年表によると、1942年ですね。

**立花** 42年、そうすると2歳か。

——先生の一番初めの記憶はどういったものですか？

**立花** おそらく3歳の時です。日本から北京へ中国に渡る行き船旅は記憶にないですね。僕の最初の記憶は、北京の家からです。

——当時、どのような家に住んでいらしたのですか？

**立花** そのころ北京の日本人が住んでいた家というのは、中国の大金持ちが住む家と形式的には同じです。『金瓶梅』は読んだことない？『金瓶梅』にもあるけど、中国の大金持ちが住む家は、四方塀があり、四つの棟があり、中庭がある四合院といわれる造りの家です。昔はそれぞれ四つの棟に、お妻さんたちを住まわせていたんですが、日本人は、これ全体を4ファミリーでそれぞれ1つずつの棟に家族で暮らすという形をとっていました。その頃の遊び仲間というか、隣の家についてはとても記憶に残っています。

——では、先生が一番初めの記憶と認識しているのはその家の記憶ですね。

**立花** そうですね。具体的には、母の妹と結婚したおじさんがいて、陸軍の将校だったんです。当時陸軍の将校はすごく高い身分なんです。結婚したばかりか、する直前かの時期に、そのおじさんがブリキの箱に入ったクッキーを、お土産に持ってきたのですが、その箱に描かれた船の絵は今も覚えています。その船の絵がすごく印象的だったんです。多分それが最初の記憶じゃないかな。

——ブリキの箱の船の絵ですか？

**立花** そう、中にお菓子が入ったブリキの箱の船の絵。また、それにまつわる形で四合院の庭の周りの4家族の断片的な記憶もあります。4家族の子供同士がそれぞれ遊んでいるわけです。中でも、すごく覚えているのは隣の家のお姉ちゃんですね。当時、僕が4歳くらいでお姉ちゃんが7歳くらいだと思うのですが、僕、ここに（左肩の下の方を見せながら）ほくろがあったんだけど・・・

——今はないんですか？

**立花** そう、今はないんです。そのお姉ちゃんが、「そんなのこうやれば取れるのよ！」って、思いっきり握って取ったんです。そしたら、血が出てきて。それは覚えてるね。（笑い）

——ほくろを取られたんですか？

**立花** ええ。ほくろを取ろうと試みて血がだらだら出て、顛末までは覚えてないけど、それは印象に残っている。

——当時の中国での誕生日の記憶はありますか？

**立花** 誕生日は記憶にないですね。

——誕生日を祝ったというのは、日本に帰ってきてからですか？

**立花** それは、ないです。日本に帰ってきても国全体が貧しいですから、誕生日を祝うという事はやりませんよ。お祝いをするようになるのは、日本の国が豊かになってからです。なので、子供時代にはないですね。もしかしたら、お祝いしたのかもしれないですが、記憶には残らない程度のことしかやってないですね。

## 「ビジョンは持たない」

——立花先生が「外国」で過ごした初めての誕生日は、20歳のフランスですか？

**立花** そうですね。

——リセの英語の先生の家で、先生からプレゼントに万年筆をもらったそうですね。

**立花** あまり記憶にないけど、いい万年筆だとウォーターマンがフランスだね。

——20歳の誕生日は、スペシャルだったのですね。

**立花** そうですね。というのも、その頃一般的に日本人は外国に行けないんだから。パスポートなんて貰えないんだよ。それはものすごくスペシャルですね。おそらく、あなたたちのような若い方が絶対に理解でき

ないのは、その頃日本人が置かれていた状況ですね。今は誰だって海外に行けるけど、当時は行けなかったんだから。日本という国が、そういう状態に置かれていたんです。

——皆が外国に行けない時代。出発前はどんなお気持ちだったんですか。特に心配することもなく、行けるだろうという感じですか。

**立花** 偶然というか、たまたま巡り合わせで可能になっただけで、あんまりぐちゃぐちゃ考えなかったよ。目の前にあることをやるだけ。いろんなことを心配する人は山のようにいるけど、あんまり心配しても仕方ないですから。聖書に書いてあるじゃない。

——明日のことまで思い悩むな、と。（マタイ福音書 6章 25節～／ルカ福音書 12章 22節～）



**立花** 「ヒバリだって野の百合だって、みんなほったらかしたって、鳥は鳴き、美しく花を咲かせる。人間だって特に心配することはないんだ。」とあるじゃない。基本的に神様に任せておけばどうってことないよと。

——立花語訳聖書ですね（笑い）。

**立花** 僕は、あまり心配する人って全然わからないな、感覚として。あとから考えると、うちの母親というのは欠陥が山のようにある問題な母親ではあったけれども、そういう聖書の世界観を子供に植え付けたという点は、僕にとってはありがたかったですね。だから、昔も今も普通の人心配して悩むようなことは何もないんですよ。母親はもう亡くなりましたが、それは今も同じですね。癌になって、心配しすぎる人もいて聞くけど、僕はないなあ。

——そうなんですね。次に、文藝春秋に入社、そして退社されたあたりのお話を伺いたと思います。退社理由は興味ない野球の取材をさせられそうになったからとありましたが。

**立花** まあ、それはあとで取ってつけたような理由だからね。

——Wikipediaにはそう書いてありますよ。

**立花** へー、そうなの？

——表向きの、理由ですか？

**立花** 確か、どこかに書いていたので自分の発言としてなかったこととは言いませんが。ははは。（『ぼくはこんな本を読んできた』『退社の弁』に詳述。）でも、これは基本的に辞めたい気持ちがあったから辞めたわけです。

——そして大学の哲学科に戻るわけですが、辞める前から考えていたのですか？

**立花** 辞める前から考えていたと思いますね。辞めてから、どうやって食べていくかという問題はあからね。それまで、文藝春秋みたいな会社において、働いていたわけですし。卒業は仏文なので、哲学科には学士編入という形で入っているんです。学士入学は、もう一度試験をやるかという事実上試験はなく、面接だけです。面接で何を聞かれたかといえば、「君、文藝春秋にせっかく入ってなんで辞めるんだ。」と、こう聞かれました。

——なんと答えたのですか？

**立花** 辞めたかったからですと言ったかな。ちゃんとした答えはなかったかもしれないです。事実問題として、東大を出て文春に入ろうと思っても、入って年にせいぜい1人ですかね。だから、文春に入って辞めるということは、あまり普通ではない行動だったんじゃないかな。

——年表を見ると2年間で辞めてらっしゃいます。辞める時には、こうやって食べていくんだというビジョンは持っていましたか？

**立花** 全くなかったですね。

——では、ビジョンを持ち始めるのは、いつ頃からですか？

**立花** ビジョンは一貫して無いです！ もちろん、今もビジョンはないですよ。（笑い）

——取材をして、様々なことを書いて食べていくということもなかったのですか？

**立花** それもないです。でも、辞めても、なんとなく食べていけるとは思っていました。それは、学生時代に食べていましたから。主として、翻訳で食べてましたけど、翻訳以外にもいろいろなアルバイトをやりました。それこそ、この前書いた『自分史の書き方』（P.131～P.132）に出てくるでしょ。あの本の中で、大学時代できるだけたくさんアルバイトをしようと思って、30種類くらいやったと書いている人がいるんだよね。

そこに僕は、地の文で、「僕は30種類まではいかないけれども、20種類くらいやっていたはずだ」と書いていますよ。中でも、実入りがいいという意味では翻訳の実入りはものすごくいいというのがわかった。おまけに、理数系の文献の翻訳はものすごくペイがいいということがわかって、これで楽に食っていけると思ったよ。だから、文春に入って給料をもらったって少ないと感じたね。

——学生時代よりもですか？

**立花** うん。文春給料安いからね。辞めたあとは、知らないけど。今は多少良いのかもしれないけれども、その頃はものすごく安かった。たしか、週給4900円です。週給ですよ！ その頃文春には、外国はどこも週給制度だから、我々も週給制度にしようと考えた社長がいて、ある時期文春は週給だったんですよ。だから、その時、週で5千円札もらえなかった。千円札だった。

——当時の他の企業と比べても低いということですか？

**立花** 決して高くはないです。中小企業としてか、大企業といういわゆる世に名前が通っている企業というレベルで考えるかで違うんですけど、実質は、出版社は中小企業そのものですからね。僕がいたときの文春は、社員が200人くらいです。給料が今言ったレベルでしょ。でも、長くいるとどんどん給料が上がって株式の配当なんかもあったりして、僕は、良くなる時までいなかったんです。

——もともと、文藝春秋に入ろうと思われたきっかけはあったのですか？

**立花** それは、「でも、しか」ですよ。学生課に行くとか求人がたくさん来てるでしょ。そこで、いろいろ考えて、普通の一般の企業に入って何をやるかと言ったら、能力があるとも思えないし、出版社くらいかなというね。「でもしか」というのは、出版社「でも」というのと、出版社「しか」ないという感じですね。

——入社試験の様子は覚えていますか？

**立花** 覚えています。たしか、作文で入ったのかな。えーっと、「サラリーマン」というタイトルだった気がするな。それで、一時間くらいかな、時間内に書けるだけ書いて、それで終わりですよ。もうひとつは、ずっと前から有名なのは、常識テストというのがあったな。今でも出版社は、作文と常識テストと、基本的には2つじゃないかな。

——作文には、どういう内容を書いたのですか？

**立花** どうってことないことだよ。でも、時間が限られてますからね。できるだけ早い速度で書かなきゃいけないから、頭の中から湧き出るままに、書く以外ないですよ。

——社会人となってからは、寝る間も惜しんで働いていらしたのですか？

**立花** 会社に入ってから、寝る間も惜しんで働くという事は、ないよ。寝る間を惜しんだら、頭が働かないからね。頭脳労働者というのは、常にぐっすり寝るのが必要なことなんです。(笑)

——文藝春秋を退社されて2年後、先生は今使っているお名前「立花隆」になるわけですが、どうして、本名ではなくてペンネームを使おうと思われたのですか？

**立花** 最初に「立花隆」で書いた連載がそのまま『素手でのし上がった男たち』という本になったんですよ。確か、文春でサラリーマン向けの増刊号を出していて、何号か連載していたのを本にしたんです。その増刊号の編集部は、それまで一緒に仕事をしていた僕の数年先輩たちで、彼らが「これは、そのままペンネームにして使った方がいいんじゃないか」というんでね。ちなみに、「立花隆」という名前をつけてくれた人は、出版業界では有名な堤さんという人です。

——ご自身では、「立花隆」というペンネームは気に入っていらっしゃいますか？ また、「立花隆」という字をばっと見た時に、これが自分であるという意識はありますか？

**立花** それは、そうですね。今は、自分の本名のほうが変な感じがするからね。パスポートとかで、自分の名前を書かなければならない時に、なんとなく変な感じはしますね。

## 「レトリック」

——お話を聞いていて、日本人が国外に行けない時に、フランスへ行ったり、突然文藝春秋をお辞めになったりと、先生の行動力にはとても驚かされます。

**立花** なんとなく、僕は普通のことだと思ってますけどね。あんまり普通のことじゃなかったのかもしれないけれども。思ったことをすることにおいて、あまり躊躇をしないというか・・・

——それは、今でも変わらないですか？

**立花** 今でも、そうですね。基本的にはそうです。だからと言って、思ったことが次々実現する世界ではないということ、もうずいぶん前から学習していますからね。

——本を書いていて行き詰まるという経験はありますか。たとえば、『天皇と東大』も長い年月をかけて執筆されましたが、途中で投げ出したくなるような時はありましたか？

**立花** 『天皇と東大』でいえば、そんなになかったですね。あれは、割とスムーズに書けたと思いますよ。

——本を書いていて一番行き詰ったのはいつですか？

**立花** それはものによってちがいますね。基本的に僕は取材して書くということをやっているけど、取材がうまくいかないということもありますね。たとえば、角栄研究のように、これは隠しているにちがいないと思う、しかも普通ではない隠し方をしている。しかし、

どうやってそれを隠しているかがわからない。そうすると、可能性を考えます。今度は自分が角栄になって、実際にやってみるとするなら技術的にどうすればいいだろうか、自分の仮説通りそれをやっているとしたら自ずと証拠が出て、つかめるのかどうか徹底的に考えます。またはそうした時は、「そういうものでないと、説明がつかない。」といった書き方ですね。100パーセントこうだとズバッと分からなくても、こうだとすれば、こうなっているはずだというやり方ですね。そうした形で、物事を書いていくということになります。厳密に言えば、こちらにも推論部分というのがあられるわけです。それが、動かぬ証拠までとは行かなくても、どう考えてもこうでなければ説明がつかないでしょうという言い方しかできないような。それをいかにもっともらしく、説得力を持って書くかということですね。そのために必要な傍証はたくさん集める。証拠1だけでは十分ではないところを、証拠2を重ねて、証拠3、4をさらに合わせるといった形の、証拠の積み重ねですね。

——私たちが目にするのは書籍に出ている部分だけですが、その後ろ側には膨大な積み重ねがあるんですね。

**立花** それは、そうです。圧倒的に後ろ側のほうが大きいですよ。実際の文字に書き起こしている部分というのは、背後にある10分の1とか20分の1とかそんなもんじゃないかな。もっと少ないかもしれないね。

——書く際にもっともな証拠があれば、確実に書けるわけですが、推論になってきて、ズバッと言えない時に心苦しきみたいなのはあるのですか？



**立花** 心苦しいというか、それはちゃんと書けばいいんですよ。そこは、レトリックです。レトリックとはそういうものなのですが、そもそも日本人はレトリックというのはわかっていない。レトリックというものを習っていないでしょ。学校教育でレトリックというものを習いましたか？ ないと思うんですよ。日本の教育ではレトリックを教えるということは、そもそも一貫してないです。フランスはリセ（後期中等教育機関。日本の高等学校に相当する）の正規の科目がレトリックです。知的修練というか、若い子供を大人にするために必要な獲得すべき知的技能の1つがレトリックをうまく使うということなんです。レトリックをうまく使えば、怪しいことでも、もっともらしく言ったり、いろんなことができるんです。それとは逆に、人から突っ込まれた時に防御をすることもできます。「わたしは、あの文章においては、これしかいってない。あなたが言っているのは別のことを攻撃している。全然違うじゃないか」ということができるわけです。つまり、言葉を通じて「チャンチャンバラバラ」ができるわけです。それがレトリックなんです。けど、日本にはそれがありません。せいぜい体験しても、児童会とかで、「はい、〇〇くんはいけないと思います！」といった感情的な発言をして終わりです。なぜいけないかが抜け落ちている。

——「本音と建て前」はどうでしょうか？レトリックとはまた異なるかもしれませんが、日本式の戦法のように思われます。

**立花** そうですね。非常に似た部分はありますね。本音を隠して建前を貫くというのは、それはレトリック

の一種ですから。それを、意識的に使える人間と、そういうことを意識したとたん頭がぐちゃぐちゃになり言葉の戦いに負けてしまう人とがいますね。

——なるほど。「本音と建て前」もレトリックの一種でしたか。どうしたらレトリックを身に付けられますか？

**立花** それは、学ばばいいんです。そこに、(棚を指さして)フランスのリセの教科書があるでしょう。『哲学講義』(全4巻 ちくま書房)そこに基本的なことが載っているはずですよ。これを読むと、日本とフランスでは、どれほど教育に関する知識水準の違いがあるかわかります。高校の教科書なんです、これが。日本では大学の哲学の教科書でもおかしくない極めて進んだ内容で、哲学のあらゆる側面についてカバーしています。そういうことを高校で学び、高校から大学に行くには、入学資格獲得の全国統一のテストがあるんです。高校でこうした水準で授業をする国と、そうでない国とでは、結果の差は明らかなんです。一般の成人になって、たとえば日常のビジネスで、馬鹿みたいなことを言っている、ろくに英語もフランス語できない奴というカテゴリーで括られる人間と、その場で一挙に論争して勝つという人間とに分かれてしまいます。

——日本人は外交が苦手と言われるのも、そういった要素からくるのでしょうか？

**立花** そうですね、基本的に。

## 「残り時間、残りエネルギー」

——先生は著作を多く出されていますが、昔書いた本を読み返したりすることはありますか？

**立花** それは、あまりないですね。・・・でも、たまにあるかな。必要な場合はね。今だと、『臨死体験』

のセカンドバージョンにあたる仕事が進行していますから、必要に応じて読み返すと、けっこう面白いこと書いてあるんだって思ったりしますね。(笑い)今読んでもあれは、面白いですね。本当の話。(笑い)

——かつて書いたものを読んで、驚かれることはありますか。自分がこんな風感じて、こんなことを書いていたのかといったふうに。

**立花** うーん・・・そんなにはないですね。だいたい、少し読めば内容を思い出しますから。いろんな意味で人間の記憶力ってすごいんですよ。

——同じテーマを扱うという理由以外であまり読み返しはなさらないのですか。

**立花** あまりないですね。基本的には。

——昨秋より慶応丸の内シティキャンパスで『天皇と東大』の講義を担当されていましたね。その時ももう一度調べ直したり読み直したりされましたか？

**立花** そうですね。『天皇と東大』、授業はもう終わりましたね。ただ、『天皇と東大』で近代日本がなぜこうあるのか、ということを書いたつもりだったけれども、実はあれだけでは足りないというのをその後強く思っていますね。

——新たに書き足したいという欲求もありますか？

**立花** それはどうだろうね・・・残り時間と、残りエネルギーの消費の仕方を考えると多分やらないと思いますね。実はまだ過去に、単行本の形にはなっていないけれども、雑誌で連載して止まっているいくつか重要なものがあるんですね。たとえば、『天皇と東大』の流れでいえば、天皇の側の話ですね。『天皇と東大』は、終戦で終わっていて、戦後からはそれが憲法の問題として、その続きみたいな要素で、昭和憲法がどういう風にできたかという話になるんですね。以前『月刊現代』で書いていたんですよ。あれがまとまっていなくて、書かなくてはいけないと思っています。そもそも、あの連載は、安倍晋三が前回の総理大臣の時に改憲をたくらんでいて、それに一矢報いる格好で書き出しているわけですね。そのうち、安倍内閣自体がつぶれてしまって、そのあと講談社の『月刊現代』が休刊してしまうということがありまして、それで調子が狂ってしまって。そのあと一回、東大で学生たちと一

緒に憲法問題のシンポジウムをやって、その時に、けっこう雑誌にはない内容まで取り上げたりして、あの時に使ったパワーポイントや資料も一緒にまとめなきゃいけないと思っています。そういう気持ちは今も持っています。

——残りのエネルギーをどこに向けるかですね。

**立花** そこなんです。僕のエネルギーもうそんなにならぬから。74歳というのはその人の晩年期ですから。(笑い)

——なにをおっしゃいますか！先生のエネルギーはまだまだあると思いますよ！

**立花** いやー、昔と比べたら、全然違いますね。一番働いていたのは、おそらく東大の先生を始めた時期じゃないかな。あの時期は、何しろ月刊誌の連載を2本やって、週刊誌の連載を1本やって、授業を1つですよ。授業というのは週刊連載みたいなものですよ、週1ですから。次から次へと締め切りが来てね。あれが自分の限界でした。それで、パンク状態になって、病院に入るわけです。

——人生における仕事のピーク時ですね。

**立花** けれども、スケジュー尔的にきついの、けっこう学生たちと飲んだりしていたんだよね。突然明け方に、「築地に行ってすしを食べに行こう」とかね。そのころ、肉体的にパンクするというか、突如背中に激痛が走って、あまりにも痛いので病院に行きました。血圧を測ったら200を超えていたんですよ。医者に、「君立っていたらだめだ、寝なさい。脊柱沿いに走ってる動脈が血圧に耐えきれなくて、ぼんと破裂したらあなたおしまいだよ」と言われました。

——体からの悲鳴ですね。

**立花** 結局3週間くらい入院して、痛みをあらゆる角度から検査しても原因がわからなかったんです。いろんな科を引き回されてあっちこっちで検査して、それでも結局分からず、最後に、連れて行かれたのが整形外科だったんです。そこで、整形外科の先生が、これはおそらく体が妙なひねり方をして、そのひねりで痛みが出たのではないか、ということを書いたんです。それくらいしか考えられないと。でも、それって、少し、藪医者的に聞こえるじゃない。

——たしかにそうですね。

**立花** 始めは、そんなこと全然信用してなかったんだけど、しばらくして退院したんです。そのころよくやっていたのが、徹夜が続いて眠いけど寝てはいけない時なんか、ちょっとだけ、椅子に座ったまま寝るといってしていました。こうやって、足を机にのせて、椅子を後ろに少し倒して不安定な状態にして寝るといって形です。(写真) こうすると、寝てしまっても、ガクッとなって自然に目が覚める。実はこれ、エジソンが自叙伝に書いてるんです。そうか、これやればいいんだって思って、不安定な状態で寝ていた。けど、少し寝て、ガクッとなって起きると、その時に体をひねるわけです。退院してしばらくしてから、もう一度それをやってみたら、体が同じ痛みを発するわけです。その時に、これが原因なんだと分かって、まさしく整形外科の先生が言っていたのと同じだったんです。



(エジソンの真似をする先生)

——まさか、整形外科の先生もこんな寝方をしているとは思わなかったでしょうね。(笑い) 以来、ご自分のエネルギーを考えながら仕事をなさるようになったのですか？

**立花** そうですね。そうせざるをえない、というところだね。要するに、入院してしまうと、寝床で仕事しようと思ってもできないですからね。自然と休むんですよ。ダウンした時は、たしか夏休みで、入院していても大丈夫というか、仕事を続けてやらなくてもいい時期であったこともあって、そこからペースが少しゆるんだというのがありますね。

## 「死と眠り」

——立教大学での「大学と現代社会」の授業中に、突然先生の口から、癌になりましたと聞かされた時のことがとても印象に残っています。その後も、「今自分はこのステージでね」なんてお話ししながら癌に関する講義をされるので、先生にとっては癌さえも好奇心の対象でしかないのか！と驚かされました。

**立花** そうでしたっけ。あれは、どんな授業だったか。

——現代の教養がテーマで、脳と神経、グーテンベルクや百科全書、人間の眼の仕組みから宇宙の話までありとあらゆることがトピックとして取り上げられました。自分が足を運んだ美術館や博物館の魅力をみんなの前でプレゼンする回もありましたね。実にとってもお買い得なバラエティパックのような講義でした。

**立花** そうだったね。でも、授業のやり方に腹を立てる学生もいたんだよ。教科書を指定して、きっちりや

ってほしいという学生もいた。

———そうですか。人それぞれですね。

**立花** そうなんです。

———最初のレポート課題は「自己紹介」でした。5つ質問があり、それに自分なりに答えるというものでしたね。そのうちの1つに、「自分にとって人生のゴールはどこか」というような質問がありました。いま、先生にとって人生のゴールはどこですか？

**立花** 死ぬことじゃないですかね。

———死ぬことですか。

**立花** 死の後に、先はないんですよ。でも、必ずしもないと思わない人がいて、ある強さをもって開き直って「ある」という主張が世の中に広まっていますけど、ぼくはないと思いますけどね。自分の意識とは存続しないと思います。だって、人間って人生の3分の1は眠って意識失ってるのよ。大抵の人は、そのことを忘れてるよね。

———ミヒヤエル・エンデか誰かが、人間にとっては眠ることが死の練習のようなものだと書いていました。

**立花** そういう側面はありますね。だから、毎日気持ちよく寝て気持ちよく起きてというサイクルがうまくいってない人は、いろいろな意味で頭が正常に回ってない状態に結びつきやすいですよ。

———そうすると、先生が病気のころはいかがだったんでしょう？

**立花** あれはよくないね。(笑い)

———知的労働者は寝なきゃいけないとおっしゃってましたしね。

**立花** そういうことですね。

———先生、これから暑い季節がやってまいりますけど、快眠の秘訣はありますか？

**立花** うーん、秘訣はないけど、今は寝る前にお酒を飲むことだけど、昔はお酒を飲まなかったね。なんだろうね・・・(沈黙)・・・寝やすい姿勢で寝れば、だいたい寝れるんじゃない。

———ははは。

**立花** お母さんのおなかの中の赤ちゃんのような姿勢を取るとだいたい人間は自然に寝るといわれていますね。絶対に良くないのは大の字に寝て、天井を見上げている姿勢がよくない。

———そうなんですか。

**立花** 体は横にしたほうがいいんですね、基本的に。寝返りはうたないといけませんけど、人間の体は自然に、みんなできるんです、ほっといても。あんまり悩む必要もないんです。

———悩まず、きちんと睡眠をとることが人生の秘訣なんですね。(笑い) 本日はインタビューにご協力ありがとうございました。

**立花** それでは。

2014年6月17日(火) 立花事務所にて

取材：岩間 響、田口 舞

\*おまけ\*

—(田口) そういえば、「大学と現代社会」の授業は、文章の書き方もテーマになっていましたね。先生、さっき話に上がった初回のレポート課題ですけど、私、先生に書く量が少ないと指摘されたんですよ。

立花 文章を書くのがうまくなるには、どうしても書く量はあったほうがいいですね。

—(田口) 自分では足りていると思っていたんですけど…。

立花 そうですか。それでもそう言われるということは、あなたが有意に低かったんじゃない(笑い)。自分のことってなかなか分からないですからね。文章は自分を客観的にみる要素でもありますね。

#### インタビューを終えて

冒頭で飛び出した、「あんまりしゃべりすぎると大変だよ、あとの編集が。(笑い)」という言葉に気にするでもなく、また次の日の締め切りを心配するでもなく、誕生日の話題からスタートしたインタビューは、満州国・インターネット元年・2000年問題・本の未来といった、ここに収録されずに終わった話題も含め、たつぷりと120分に及ぶものでした。尽きることのない話題、わかりやすい説明、時折みせる優しい表情は、少し前まで立教大学で授業をされていた時の先生そのもので、様々なテーマが結びついたと思ったら、別のところに飛んでいき、インタビューをしているというよりも懐かしい授業を受けているようでした。

最後になりますが、本当にお忙しいスケジュールの中、インタビューを快く引き受けてくれた立花先生にこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。そして、お誕生日おめでとうございます。

また、忙しい仕事の間に校正を手伝ってくれた菊入さんと、前日に表紙のデザインを文句も言わずに引き受けてくれたYさんに感謝いたします。

いわま きょう

# 立花先生へ誕生日メッセージ

[立教セカンドステージ大学]

教員生活を終わらせたと同時にこの授業を受けました。  
受けるたびに毎週 先生のところに原稿を提出するという課題。

それまで子供たちの提出した課題に毎日赤ペンを入れていたわたし。  
当たり前と思って食事や休憩の時間を削ってでも やっていた。  
そのままで反対のことを 『知の巨人』立花先生がしてくださる。  
なんと幸せであったことか。

書く大変さより そのことの楽しさでいっぱいな時間でした。

MO

拝啓 立花隆先生

お誕生日おめでとうございます。

RSSC に在籍していたとき、先生は講演を殆どなさらないと聞いたことがあるのですが、自分史の授業を取ったご縁で、お話を聞かせていただける機会があることを光栄に思っております。

先日、先生の著書『ぼくはこんな本を読んできた』を久しぶりに開いたところ、先生は哲学的人間であり、神秘思想に興味をお持ちだということ思い出しました。先生は、「神秘思想、神秘主義には若いときから一貫して関心をもっています。」「あらゆる宗教の根底には神秘主義がありますね。僕はものすごくロジカルな人間でありながら、一方で神秘的なものへの憧れみたいなものもずっとあるんです。」「臨死体験にもそうした一面がありますね。」と語っておられます。

先生が取り上げるテーマは大変幅広いのですが、私はその中で『宇宙からの帰還』や『臨死体験』など、人間の内面を扱っている著書に惹かれています。1994年に発行された『臨死体験』の最終章には、「いずれの説が正しいにしろ、今からどんなに調査研究を重ねても、この問題に関して、こちらが絶対に正しい

というような答えが出るはずがない。(略) それならどちらが正しいかは、そのときのお楽しみとしてとっておき、それまでは、むしろ、いかにしてよりよく生きるかにエネルギーを使った方が利口だと思うようになったのである。」と書かれています。

ところが、先日、一期生の友人から、先生がラジオに出演され、脳科学がここ20年で飛躍的に進歩したので、臨死体験の取材をしているという趣旨のお話をされたと聞きました。きっと、先生の興味を掻き立てるような事例がたくさん出てきたのでしょう。取材を通してこの問題の答えがどう変化するのか興味津々です。その取材の成果はいつごろ発表されるのでしょうか。テレビや著作で新たな知見に触れる日を楽しみにしております。

最後になりましたが、先生におかれましては健康に留意され、末永く作品を発表されるよう、心よりお祈りしております。

敬具

6月28日

RSSC 一期生 砂庭幸子



## 1. 知の巨人

誰がこのように呼んだのか分かりませんが、これこそ立花先生以外には使えない称号です。その「知の巨人」たる先生から私たち RSSC 一期生の 43 名（科目選択生）は、「現代史の中の自分史」と題する講義を受講しました。

人間としての生き方の根源に迫る授業、一回一回が衝撃的な講義でした。

たくさんの本が詰まった「重いキャリアバッグ」を引っ張っての先生のお姿が浮かびます。

## 2. 先生の大好物？

私は、よく学友たちに質問しました。「先生の大好きな食べ物知ってる？」「知らない、分からない」「私、知っているんだ」「へえー、何？」「みんなビックリ。「何？」「何？」「分からない？」「分かるでしょう！」「分からない」の繰り返し。「決まっているじゃない・・・〈本〉ヨ」「あっ、そうか」途端に納得。3階建の「猫ビル」の中は、本、本、本の山。階段にも本が積まれていました。階段の上り下りには身体を斜めにするしかありません。本がビルの主。TV にも放映されましたネ。

## 3. 私の宝もの

ある時、光栄なこと、私は先生から、先生の著になる『天皇と東大』上・下巻を拝受しました。いち早く

### 『天皇と東大』タイトルに寄せて

「A と B」というタイトルのつけ方は、名詞 A と名詞 B を接続詞「と」でつなぐだけのもっとも安易な方法である。しかし、『天皇と東大』は、最初に「このタイトルって？」と読者に疑問を抱かせ、読み進めるうちに「これ以上のタイトルはない！」とうならしめる、最高・最強のタイトルだと思う。

この『天皇と東大』を読んだ我々 RSSC の仲間 4 人。2 年余りもかかってしまい、読み進めるうちに、以前読んだ部分はいつの間にか忘却の彼方……。題して、「大作と我々……」。

それを知った同輩の笠木ヒロ子さん、始業の前、授業開始の準備をしておられた先生に、教壇へ飛び上がって、「何故しずえに本を上げたの？」と詰問。「あなたも 80 歳過ぎたらあげるヨ」これにはさすがの彼女も啞然として声なし。その後先生の著になる文庫本 2～3 冊を購入、先生からサインを頂いて大喜び。ユニークな素敵な親友です。

拝受した御本をテキストに勉強仲間と改めて日本の歴史を学び直しました。

## 4. 不可解な先生の板書！！

立花隆著『自分史の書き方』講談社のカバーの後に、椎橋平吉氏撮影による先生の授業風景があります。先生は、よく黒板を使われますが、まさにあの撮影は象徴的。いつもあまり字はありません。教壇を往復しながら、丸やら、何やらグジャグジャと、「でもそこには深い内容」が一杯こめられているのです

おわりに

先生の講義から生まれた 350 ページに及び立派な本が本屋の店頭に並んでいます。うれしいですね。RSSC 開学のアイディアに「快哉を叫んだ」という先生のお言葉が脳裡に焼きついています。限りない恩恵を頂いている至福の日々に感謝あるのみです。

RSSC 一期生 木村静枝

私の最大の疑問は、立花先生というわれわれと同じ「ような」人間が、ジャンルもさまざまな膨大な資料を読み込み、理解し、さらにそれを“ノンフィクションのおもしろさ”に変換させうるのか？という点である。日本の近現代史と同様、学校の先生もぜったいに教えてくれない難問中の難問である。よって、立花先生にはいつかぜひ、この点についてご執筆いただきたいところであるが、タイトルはやはり「天才とバカボン」になるのでしょうか？

(RSSC「現代史のなかの自分史」  
元受講生 池田ちか子)

## 不死身の「知の巨人」

2008年4月に立教セカンドステージ大学1期生として入学し、立花先生の「現代史の中の自分史」の授業を受講させていただきました。

先生は、火曜日迄に受講生から提出された43人分の自分史に目を通され、木曜日の授業で講評するため、水曜日は毎週徹夜されました。先生は12月27日に膀胱ガンの手術を受けられ、半年も経っていいなかったのです。



この写真は、2009年5月2日「20世紀と昭和の歴史」の授業の様子です。スクリーンには、5月1日（前日）に受けられた「心臓の冠動脈にステントを入れる」カテーテル手術の説明が投影され、自ら解説されています。左手首には、カテーテル手術の傷跡を覆う絆創膏が痛々しく巻かれていました。この日は、2泊3日で入院中の病室から外出し教壇に立たれたのです。

授業の後、受講生二人で先生に付き添い、入院先の東大病院へお送りしました。14階の病室は部屋中に本が山積みで、とても入院患者の病室とは思えませんでした。

先生は、翌（3日）朝、講演のため金沢へ向かわれました。

立花先生は、不死身の「知の巨人」です、

RSSC 1期生 HS

## 【慶応 MCC】

<先生の著作がきっかけです。 三宅 海>

中学生の頃、『知のソフトウェア』を読んで、出来事を分析することは、なんともすばらしく、楽しそうだと感じ、こういう事ができる大人になりたいと希望していました、現在もそうです。



大学生になって、民事訴訟法のゼミを選択したところ。指導教授から『論駁』を読むことを薦められました。精緻に議論の積み上げを出来ることが、日々学問をする

意味だと、自覚した機会でした。

『精神と物質』を読み、この取材準備には、膨大な量の文献、さらには最新の分子生物学に関する論文にまで、あたっているということを知るに及んで、ま

ずはマネだけでも、と仕事で大量の文献と資料を揃えてやってみたところ、良好な結果と昇給を得ることができました。昇給の使い道の一つは、先般開講された、立花隆先生の講義の受講でして、「天皇と東大」を軸に日本の近現代史を読み解く機会を得ることができました。

ナマで目標とする人物から、講義を受けるということは、想像以上に刺激的な出来事でした。そしておそらく、こうしたテーマで講義をできる方は唯一ですから、講義日には一切の余計なスケジュール（特に残業）を入れずに臨んだ次第です。講義完結後の楽しみは、講義ノートに手を入れて、折に触れて示された参考文献を読み解くことです。

自分がなりたい大人になっているかは判然としませんが、楽しく過ごしていることは実感しています。

大目標である先生の記念行事に参加できること、とても嬉しいです。

いつまでも楽しい日々でありますように。

10回の授業を受け（1度はビデオで受けた）毎回先生が約10冊ぐらいの参考図書を紹介してくれました。紹介だけで100冊にもなります。それを先生は皆面白いから読むとよいと云ってました。全部は無理ですが10数冊程購入して、ずっと読み続けています。そのため昭和史以外の本が読めないのが残念ですが、この機会に昭和史関連の本は徹底して読もうと決めました。団塊の世代の我々が昭和史を学んで、子供たちの」世代に繋げたいと思います。次男が「天皇と東大」4巻を読んでくれたのが嬉しかったです。参考図書のなかで「坂口安吾」関連の本を読んで、改めてあの戦争中に坂口安吾は自分の意見を持ち続けていたのに 共感しました。「墮落論」などというタイトルから 酒飲みのだらしない「太幸治」のような作家と思ってましたが、芯のある人だったのが分かりました。東大の先生達でも立派な人が沢山いましたが、戦時中でも坂口安吾と永井荷風は我々凡人にとって信用できる小説家だったんですね。昭和史な関する本を読んでいると、戦争前から戦争中と読んでいてつらく暗い気持ちになります。そこで、気分転換に私は「落語百選」春夏秋冬を読みます。案外効果がありますよ。先生の紹介した図書に加えて 慶応m c cも推薦の半藤一利先生の本もかったばしに購入して読んでいます。半藤先生や立花先生は高齢で

拝啓 立花先生におかれましては、ますますご健勝のことと、心よりお慶び申し上げます。

実は先日、偶然に先生のお姿を拝見する機会がございました。と申しましても、NHK TVの番組でのことです。何気なくTVのスイッチを入れたところ、変わらない先生のお姿を目にし、つい最後まで見入ってしまった次第です。有名な「猫ビル」でのインタビューが中心の構成でしたが、慶応MCCでのセミナーの記

す まだ生きているうちに直接にお会いして話を聞こうと思っています。長生きしてください。お願いします。先日私の母親（大正6年生まれ 5年前に死亡）が持っていた本を整理したら「天皇陛下とマッカーサー」菊池久著の文庫本が有りました。立花先生の参考文献一覧の「天皇・皇室関係」の中に入っていないませんでした。昭和天皇が亡くなる前に母親がこんな本を読んでいたの、知りませんでした。本の最後に母親の自筆で「昭和64年1月7日昭和天皇崩御、1月8日平成となる」と記していました。私も読んで大事に保管することにしました。この本は天皇とマッカーサーの友情を書いています。著者の菊池久氏は読売新聞の政治記者だとのことでした。マッカーサーもいい人だったのが分かりました。さて今は、伊藤之雄先生の「昭和天皇と立憲君主制の崩壊」685頁の本を読んでます。歴史家の先生の本は真面目すぎて つまらないですが、読めばその時代が良くわかります。我慢して読んでいます。こんな本を読む気にしたのも、立花先生のせいですから。6月28日 先生や仲間の皆さん会えるの楽しみにしています。6月14日 谷口泰史

憶を重ね合わせながら、TVの画面を拝聴しておりました。

セミナーでは、いつも30分ほど前に教室にお入りになり準備に余念がなかったことや、講義が毎回時間超過であったことなど、今更ながら先生の大変熱のこもった講義を受講する機会を得たことを、改めて有り難く思う次第です。先生の講義には毎回新鮮な印象を覚えるとともに、随分とインスパイアされたものでし

た。先生の足下にも及びませんが、結局、近現代史関係の書籍を100冊ばかり買い込み、順次読み込んでいくところ。素人なりに、日本の近現代の出来事を理解するためのパースペクティブを持つことができれば、と考えております。

それにしても、先生の扱われるテーマの幅の広さは驚くばかり。なかでも自然科学関係のもので「サル学」や「脳科学」のご著書を、以前に大変興味深く拝読いたしました。最近も、文春誌上に生命科学に関する対談を掲載されておりましたが、今後、生命科学に関するご著書を上梓されるご予定なのでしょうか。であれば、とてもゆしみなことです。

今年もそろそろ8月15日が近づいて参りました。

### 立花 隆 様

立花先生、お誕生日おめでとうございます。

昨年、10月より3ヶ月に渡って【「天皇と東大」を軸に日本の近現代史を読み解く】講座にご登壇いただいて以来、久しぶりにお目にかかれますことを、本当に嬉しく思います。

あの講座は、私が慶應MCCに入社して、初めて担当した講座でもありました。



あちらこちらで配慮が至らず、ご迷惑をお掛けした点多々あったかとは思いますが、私自身講座をオプザブさせていただきながら。また、まとめのメ

おそらくさまざまなメディアである戦争に関する事柄が取り上げられることでしょう。私は幸いなことに、12回にわたる先生のセミナーの全てに出席することができましたので、「8月15日と南原繁を語る会資料」を直接頂戴する幸運に恵まれました。そうした経緯もあり、今年は終戦直後の困難な時期に南原繁が語ったことを、改めて確認してみようと思っております。

末筆となりましたが、これからもますますご健筆を振るわれることを、心より祈念いたしております。

敬具

平成26年6月吉日

山内 均

ールを作成しながら、気づきの多い時間を過ごさせていただきました。

沢山の気づきの中でも、恥ずかしながら、これまで近現代史についてほとんど学んで来ず、そもそも「過去を知る」ということについて、自分自身の興味が希薄であったこと。それを認識できたことが、一番の大きな気づきだったかもしれません。

立花先生が「自分史の書き方」を出版された際のインタビューでも仰っていましたが、

「私たちは、意外と親の若い時代の経験を知らない。また、自分が年を重ねて、そうした親の経験を聞きたいと思う頃には、親はおらず知る術はなくなっている。」といったお言葉にとあわせて、過去に興味を持たず、積極的に知識を取り入れることをしてこなかった自分の考え方やスタンスに、大きな衝撃を受けた時間だったとも言えると思います。

これまでの活動で得てこられた圧倒的な知識を、分かり易く柔らかな口調で語ってくださる立花先生のことを、親しみと共に尊敬しております。

まだまだ、沢山の事を立花先生から伝えていただきたいと思っておりますので、今後とも末永くよろしくお願い致します。

石井雄輝

## [立教大学21世紀社会デザイン]

「おれ、ガンだから死ぬ前にアウシュビッツに連れて行ってくれ」  
そういわれて、一緒にヨーロッパを旅してからかれこれ4年、  
彼の地で悪いものを落としてきたせいか、  
はたまた新たな使命を得てきたせいか、  
死神はしっぽを巻いて逃げちゃったみたいですね  
その調子で、もっと元気に、長生きしてください。  
そして、  
「私、博論を出版するから、先生に本の帯を書いてほしい」  
というときがきたら、  
今度は私の願いをかなえてください♪

佐野 敦子

### 立花先生とのアウシュビッツの思い出

立教大学立花ゼミ 9期生 渡部 昭

定年退職後、嘱託として働きながらの大学院生活の中でも、アウシュビッツ研修旅行は、私にとってはそれが何であるかはっきりは分からないが、ドッシリとしたものを感じさせてくれる体験だった。

ハワイやシンガポール位しか海外旅行へ行ったことがない私を、現地集合、現地解散のアウシュビッツの研修旅行へ参加したいという気持ちにさせたのは一体何だったのだろうか？それは、立花先生とご一緒できるということと今行かなければ多分アウシュビッツの地を踏むことは一生ないだろうという思いからだった。

ベルリンで佐野さんと連絡が取れた。彼女はわざわざブランデンベルグ門まで私を迎えに来てくれ、立花先生が見学している美術館へ案内してくれた。その時、「ああ、これで何とかみんなと一緒にアウシュビッツへ行ける。」とホッとした気分になった。

アウシュビッツでの3日間は、驚きの連続だった。アウシュビッツ=ビルケナウの強制収容所だけで100万人以上のユダヤ人が虐殺されたと言われている。アウシュビッツ国立博物館の公認ガイドをしている中谷さんは、立花先生がみえているということで急遽我々の宿舎に来てくれた。中谷さんは、「アウシュビッツは祈りの場であり、二度と同じ間違いを起さないことを決意する場である」と語っていた。重みのある言葉だ。

立花先生のキャリーバックの中は本ばかりだった。佐野さんが先生の読書の仕方について尋ねた時、先生は、①線を引く、②〇で囲む、③「」をつける、④付箋をつける、とベルリンの本を見せて教えてくれた。先生のアウシュビッツの事前学習の凄さには驚くばかりだった。私は、帰国してから何かにせかされるようにアウシュビッツ関連の本を何冊か読んだ。でも事前にもっと読んでおけば現地で違った見方ができたのではないかとつくづく思った。





立教大学立花ゼミ・東京大学立花ゼミ・アウシュビッツ合同研修旅行  
2010.9.2～9.5



アウシュビッツ体験者・スモーレンさんと



アウシュビッツ収容所で説明を聞く



ヘルシンキで夕食



ベルケナウ強制収容所にて



クラクフ市内の博物館にて



## [立教こねこ]

「黒板に名前を書かれた人は、再提出です」そんな先生の一言に、教室で授業の始まりを待っていた私たちは唖然とさせられた。

私が履修した立花先生の授業は抽選でもなく、学部を問わず全学生が受講できるような全学部共通の授業だった。この手の授業は人数が多く、基本的には教員が一方的に学生に講義をするスタイルとなる。教員側も学生一人一人の提出物をチェックしている余裕がないため、期末に1回行うテストやレポート、あるいは出席回数での評価が多かったことを覚えている。

そんな中、立花先生の授業はまさに異色だった。100人を超える学生たちの提出したレポートを全てチェックし、赤入れまでしてあるのである。レポートの体をなさない問題外の提出物については再提出となる。自分の名前が黒板に書かれ、前まで取りに行かなければならない。ひどいときは自分のレポートが大画面のプロジェクターに映し出され、具体的にどこが悪いのかのコメントまでされる。私たちはこれを公開処刑と呼んだ。最初はこの公開処刑に慣れない学生も多く、ひねくれて授業に出なくなる者もいた。

だが、この公開処刑は出来が悪いときだけではなく、出来が良いときも行われる。そのため、自分のレポートが100人を超える受講者の前でプラスの評価を受けることもあった。人によるとは思うが、大人数の前で自分のレポートが褒められて嫌な気はしないだろう。

次回も皆の前で評価されたいという思いが、徐々にレポート提出に対する私たちのモチベーションを高めていった。加えて立花先生は我々のレポートを徹夜でチェックするというのだから、こちらも生半可な気持ちでは提出できないのである。

半期の授業が終わるころには私たち全体のレポート作成スキルは底上げされ、意欲ある学生たちのみ受講する質の良い授業となった。それでも人数はかなり多かったが、ゼミでもないのにここまで真剣にレポートの書き方を指導してくれた授業は他になかった

社会人になった今思い返してみると、一学生のレポートを文章のプロである立花先生に添削してもらうなど、なんて幸運な機会に恵まれていたのだろう、と思うのである。

当時はそんなことにも気づかず、知的好奇心を刺激される先生の授業が待ち遠しくて仕方なかった。ジャンルを問わず展開される先生の話はアインシュタインの「 $E=mc^2$ 」から始まり、果ては宇宙のダークエネルギーの話にまで及んだ。

一言も聞き逃すまいと集中して臨んだ立花先生の授業は、今でも鮮明に思い出すことができるのである。



(母に抱かれて)



(小学生)



(中学生)

# 立花隆 写真紀行

ぼくは、



(母と)



(東大立花ゼミ)



(高校生)



(大学生)

こんな人生を歩んできた。



(シェフ立花?)



(講演中)



(社会人)

Chez   
TACHIBANA

編集 こゆこ